研究ノート

浄瑠璃『壺坂霊験記』における詞章の成立

細田明宏

一、はじめに

義太夫節浄瑠璃（以下、単に浄瑠璃と表記）は貞享元年（一六八四）に成立した語り物だが、現在でも上演されるのは近世期に成立した演目が中心である。明治以降も新しい浄瑠璃を作る試みは途絶えることがなかったが、そのうち繰り返し上演される演目は決して多くない。その中で浄瑠璃『壺坂霊験記』は、明治期に作られた作品ながら高い人気を得ており、文楽や女流義太夫といった玄人のみならず素人もしばしば上演するなど幅広く親しまれている。

しかし『壺坂』は、比較的近年に作られた浄瑠璃であるにもかかわらず、成立過程には不明な点も多い。そのため『壺坂』がどのように成立したのかという問題はしばしば論議の対象となり、すでに明治中頃には『義太夫雑誌』誌上などで論争が起こっている。とはいえそれらの議論で主要な関心事となっていたのは、初演年代の特定などいくつかの事実の確認にとどまっていた。

『壺坂』成立をめぐる議論が新たな展開を迎えたのは近年、「生人形」という幕末から明治初めにかけて一世を風靡したもののその後すっかり世の中の表舞台から姿を消した見世物への理解が深まったことによる。生人形とは細工見世物の一種で、真に迫った等身大の人形で著名な伝説や事件などの場面を仕組んで興行にかけるものだが、浄瑠璃『壺坂』はもともと、西国霊場の霊験譚をテーマとした生人形『西国三十三所観音霊験記』の人気を当て込んで作られたものだったのだ。なお、その詳しい経緯に関しては、拙稿（二〇〇五）を参照されたい。

ただし生人形『観音霊験記』を当て込んで作られた浄瑠璃がそのままの形で今日行われているわけではない。現行の『壺坂』は、いくつかの段階を経て成立したのであり、その過程で詞章も二度改訂されている。浄瑠璃『壺坂』の成立を考えるに当っては、現行の詞章が成立する過程を明らかにすることが重要だろう。

現行の『壺坂』は改訂初演された当時から高い人気を得ており、詞章も固定していわば決定版となっている。そのため現行の『壺坂』が成立した後は、改訂前の詞章が上演されることはなく、今日ではその台本すら伝わっていない。しかし幸いなことに石割松太郎が論文（石割一九四四）の中で、改訂される以前の詞章を紹介している。これは消えゆく運命にあった詞章が書きとめられた稀なケースだといえよう。

しかしこの貴重な資料も、充分活用されているとはいいがたい。その理由の一つは読みにくさにあると思われる。そこで本稿では、それぞれの詞章を読みやすく書き改め、それらを対照させることを試みる。このことにより、『壺阪』の詞章が成立する過程を見わたすことができるようになるだろう。

二、浄瑠璃『壺坂霊験記』の三つの詞章

生人形『西国三十三所観音霊験記』が大阪・千日前で興行を開始したのは、明治一二年（一八七九）二月だったが、開場するとたちまち非常な大当たりをとった。そこでその人気を当て込み、浄瑠璃『西国三拾三所観音霊場記』が作られ、明治一二年（一八七九）一〇月、大阪・大江橋席において初演された。そのうちの「沢の市住家のだん」が、現行の『壺坂霊験記』の元になったものである。

その後、この『観音霊場記』は増補・改作され、明治二〇年（一八八七）に大阪・彦六座で『観音霊験記　三拾三所花野山』として上演された。これは「初編」（二月）と「後編」（九月）の二回に分けて初演されたが、そのうち「初編」に含まれている「土佐町茶店のだん」および「沢市内のだん」が、のちに独立して『壺坂』として上演されるようになった。

さて沢市開眼譚が初めて浄瑠璃になったのは、明治一二年の『観音霊場記』の「沢の市住家のだん」だったが、その詞章（ここでは「一次」とよんでおこう）には、元となった文章が存在したことが明らかになっている（石割一九四四）。その文章のことを、ここでは「原作」とよぶことにしよう。「原作」は作曲が施される以前の文章であり、そのままでは上演されることはなかった。「原作」が改作された「一次」に作曲がなされ、上演にかけられたのである。

『観音霊場記』の興行はかなりの入りがあり、後には「沢の市住家のだん」などいくつかの部分を抜き出した形での再演も行われたという。しかしその再演もほどなく途絶えてしまったようだ。つまりまだこの時点では、沢市開眼譚をテーマとした浄瑠璃はほとんど世間に広まっていないのである。

しかし明治二〇年に『観音霊場記』が改作されて『観音霊験記』として初演されると、特にその中の壺阪寺のくだり（「土佐町茶店のだん」および「沢市内のだん」）が、大変な人気を博した。そして次第に壺阪寺のくだりのみが独立して上演されるようになり、『壺坂霊験記』として親しまれるようになったのである。

明治二〇年に『観音霊験記』が初演された際の台本は伝えられていないが、初演後間もない明治二四年（一八九一）に大阪・竹中清助から出版された『卅三所花の山壺阪霊験記』の詞章は現行のものと同じである。このことから、明治二〇年に現行の『壺阪』の詞章（「現行」とよぼう）が成立したと考えてよいだろう。

さて「一次」「現行」とも、作曲したのは、三味線の名手として有名な二代目豊沢団平である（浄瑠璃の作曲は専業化しておらず、三味線弾きが行うことが多い）。団平は、「一次」では作曲のみ行い上演には携わらなかったが、「現行」の初演時には自ら三味線を弾いた。

このように作曲者が明らかなのに対し、詞章の作者ははっきりしていない。「現行」に作曲者団平の妻である加古千賀（ちか）の手が入っていることは早くから指摘されているが、それ以前、特に「原作」に関しては不明な点が多い。

このような場合には、上演に際して発行される番付を参照するのが常套的な方法である。番付には、演目やその演者に関する基本的なデータが掲載されており、もっとも基礎的な資料だといえる。ところが番付は、演者以外の項目に関しては、さまざまな事情から実態を正確に反映しないことがある。また作者や作曲者には筆名が用いられることも多い（じじつ作曲者団平も番付には「里暁」という筆名で掲載されている）。

「原作」の作者の場合もまさにそのような、番付からは実態がわからないケースだといえるだろう。明治一二年の『観音霊場記』の番付をみてみると、詞章の作成に関わった可能性があるとおぼしき人物は、「作者　玉龍舎定一」および「狂言筋書　呑襲」であるが、この

両名がどういう人物なのかはわかっていない。そもそも「作者」および「狂言筋書」が実際にどういう役割を果たしていたのかも不明である。また六月一五日付の大阪新聞では作者として「三代目松月堂呑龍」の名が伝えられている（倉田一九八〇、二六頁）が、真偽のほどは不明であり、この人物についても詳しいことはわからない。

そこで石割の前掲論文をみてみよう。この論文は、『壺阪』成立についての研究としてみた場合、生人形との関係に全く触れていないという大きな欠陥がある。しかしこの論文では明治一二年に三味線の初演をした初代豊沢新三郎が当時使っていた台本（現在は所在不明）という貴重な資料が紹介されている。この台本には最初に「原作」が書かれており、その上から詞章の改訂が書き込まれ、その改訂分には作曲者団平の自筆で節章も入っているという。音楽的な記号である節章は通常、詞章が確定した後で入れられるものであるため、改訂後の詞章は実際に上演されたもの、つまり「一次」にきわめて近いものだと考えられる（そこで本稿ではこの詞章を「一次」として扱う）。

また石割は台本を直接調べた上で、「原作」は「何人の筆か分ら」ないものの、その上から書き加えられた改訂は団平と千賀の自筆であり、さらに筆跡からその大半は千賀によることが明らかだという（石割一九四四、三〇八―九頁）。すなわち、作者不詳の「原作」を、千賀が改作したものが「一次」（一部は団平も加筆）だというのである。

「現行」にも千賀の手が加わっていることを考え合わせれば、次のようにまとめられるだろう。すなわち、作者不詳の「原作」を千賀が改作して明治一二年に初演されたものが「一次」であり、さらに「一次」を再び千賀が改作して明治二〇年に上演されたものが「現行」である、と。「原作」の作者は不詳ながら、千賀が二度にわたる改訂を行ったことで現行の詞章が成立したのである。

さて石割論文には、新三郎が使用した台本の詞章そのものも翻刻されている。ただその文章は、「原作」と「一次」とが入り組んでおり読みにくい。そこで本稿ではそれを解きほぐし、「原作」と「一次」とをそれぞれ独立した文章にすることにした。なお石割が調べた台本には、「原作」は全文書かれているが、それに改訂が加えられている部分（すなわち「一次」）は最初から三分の二程度までである（石割は、残りの部分は別の本で作曲がなされたのだろうと推定している）。

さらに、『壺坂』成立の過程をみるためには現行の詞章と比較対照させることが必要だと考え、「原作」から「現行」までを対照表にした（対照をよりわかりやすくするために便宜的に区分を設けた）。ここで「現行」として採用したのは、「沢市内の段」、「壺坂寺の段」および「谷底の段」に関しては、明治二四年に出版された『卅三所花の山壺阪霊験記』（前掲）を翻刻した『日本名著全集　歌謡音曲集』（黒木勘蔵校訂一九二九、同全集刊行会）所収の『卅三所花の山壺阪霊験記　沢市内の段・壺阪寺の段』を用いた。また「土佐町松原の段」は、「現行」で初めて書き加えられた部分だが、重要な場面ではないため出版はされていない。そのためこの段の詞章には、一九九五年一月国立文楽劇場における文楽公演パンフレット付録の『文楽床本集』（国立文楽劇場事業課編）を用いた。

文　献

石割松太郎　一九四四「豊沢団平の研究」、『文楽雑話』修文館（初出は一九三二『演劇学』一―一、二二―三七頁）

倉田喜弘　一九八〇『明治大正の民衆娯楽』岩波新書

後藤静夫　一九九六「『壺坂霊験記』の成立についての一考察―特に舞台面における活人形の影響」、『楽劇学』三、五九―七二頁

細田明宏　二〇〇五「観音霊験譚と錦絵、生人形、人形浄瑠璃―浄瑠璃『壺坂霊験記』の成立」、『芸能史研究』一六八、二九―四六頁

『壺坂霊験記』詞章対照表

凡　例

○段の区切り方や段名は上演する団体や機会によって異なるが、本稿では場面が変わるところで段を区切り、それぞれもっとも一般的だと思われる段名を採用した。

○「区分」は、詞章の対照をよりわかりやすくするために筆者が便宜的に設けたものである。

○「坂」、「阪」の表記は慣例に従った。

○「原作」および「一次」は、初演者である初代豊沢新三郎が使用した台本を翻刻した石割松太郎『文楽雑話』（一九四四、修文館）によった。石割の翻刻は読みやすさを優先させたものだということなので、この表を作成するに当ってもその方針を踏襲し、句読点を適宜補うなどして表記を整えた。また石割の翻刻には「原作」と「一次」のどちらなのかわかりにくい個所があるが、その場合は前後のつながりを考えて判断した。

○「土佐町松原の段」は「現行」で初めて書き加えられたもので、「原作」や「一次」には存在しない。この段は重要な場面ではなく出版もされていないため、詞章は一九九五年一月国立文楽劇場における文楽公演パンフレット付録の『文楽床本集』（国立文楽劇場事業課編）を用いた。なお他の段と表記を揃えるため、かぎかっこを外し句点を補った。

土佐町松原の段

区分	現行
A	機織りて、かすりおろしておさまきて、身にはつゞれをまとへども、心の錦おりかがみ、行儀も人の鏡ぞと貞女の噂日脚さへまだいと高き、八ツ下り土佐町はずれ、並木松渋茶の煙立て障子、休息所つりわらじの人の足引きも、けふ縁日の観世音　参り下向に声かけて、茶店の嬶が呼び止めて、テモはやい御参詣に花もちようどお塩梅、休んでおいで。と汲んで出す花香もよしや吉野膳。銘々茶碗手にとって、オ、権三の嬶精がでますなう、けふは一八日でたんとお参り。定めて茶の銭があがりましよ。サイナア霊験あらたかな観音様のおかげで世過ぎをさしてもらう、ありがたいお恵み。と噂まちまちするところへ、春の野もせの若草や寝よげに見ゆる肌の色。誰がつみそめし初よめな、手織着物のこなしよく歩み来るを信者は声かけ、コレコレ〳〵沢市のお内儀どこへ行かつしやる。マア付合いに休まんせ。オゝこれは〳〵皆様方。けふは暖かな日和もよし定めて観音様へお参りでござりませう、私らは日がな一日糸を取るやら綿繰るやらで稼いでも〳〵追付かぬ。貧乏ひまなし。といへばこなたは打笑ひ、テモ沢市は仕合わせ者、お嬶の器量よい上に第一男を大切に介抱片手に賃仕事、アゝとてものことにお嬶の顔たつた一目沢市に見せたいわいの。オ、それ〳〵、あつたら女房を谷間の桜くらがりのぼた餅で、アノ沢市は味知るばかり。惜しいことぢや惜しいことぢや。と誉めそやせば、お里は涙笑ひに紛らし、オホ、、、、皆さんの訳もない、目かいこそ不自由なれわたしに過ぎた沢市様、まだ目の見えた時分から許嫁した大事の夫、わしや嬉しいと思ふてゐる、なろうこともならいま一度あの目が明けてあげたい。とほろりと落す一雫貞女の誠こもるらん。人々は感じ入り、オ、尤もしごくや貞女かな、器量がよけりや心

○「現行」の「沢市内の段」「壺坂寺の段」「谷底の段」は、明治二四年に大阪・竹中清助より出版された『卅三所花の山壺阪霊験記』を翻刻した『日本名著全集　歌謡音曲集』（黒木勘蔵校訂一九二九、同刊行会）所収の『卅三所花の山壺阪霊験記　沢市内の段・壺阪寺の段』を用いた。ただし節付けなどの音楽的な記号は省略した。

沢市内の段

区分	原作	一次	現行
B① 導入部	桜花空も閑き春霞。所の名さへ三芳野や。金峰山の片ほとり、町家の棟も高取の城下に続く土佐の町。沢市といふ按摩有。生まれ付たる正直者、夫婦の中も睦じく、妻のお里は片襷、勝手へ出て汲で来る。心の端香ぞ愛らしく、サア沢市さん茶がわきました。出端一つ呑ましやんせと、ゆすり起せば目を覚し、ヲヽお里か、火一つくれぬかい。夜の短いのでとんと目がさめぬ。	営に糸はり取て賃仕事。つゝれさせてふ洗濯やのりかい物を打盤の音も幽の暮しなり。	夢が。浮世か浮世が夢か。夢てふ里に住みながら。住めば住むなる世の中に。よしあし曳きの大和路や。壺坂の方辺土佐町に。沢市といふ座頭あり生れ付いたる正直の。琴の稽古や三味線の。糸より細き身代の。薄き煙の営みに。妻のお里は健やかに。夫の手助け賃仕事つゞれさせてふ洗濯や。糊かひものを打盤の。音もかすかの暮しなり。鳥の声。鐘の音さへ身に泌みて。思ひ出す程。涙が先へ落ちて流るゝ妹背の川を。オヽ是は〳〵沢市様。今日は何と思うてやら。三味線出して。よい機嫌ぢやの。ホヽヽヽ。オヽお里か。そなたアノおれが三味線弾くを。よい機嫌に見ゆるかや。アイナア。ハテナア。おりやそんな気ぢや無いわいの。モウ〳〵〳〵気が詰つて〳〵。いつそ死んでものけう。エヽ。イヤサアノ死んで了ふ程。気が塞いでならぬわいなう。

まで、イヤコレお内儀遠くもあらぬ壺坂の観音様を願はしやれ、こなたの貞女が届いたら不思議の御利益目の當り、随分信心さつしやれや。ハイ〳〵ありがたうはござんすが賃仕事やら介抱やらで少しのひまもない私、また春永にゆつくりと。オヽさうさつしやれ〳〵、とこういふうち七ツ下りそろ〳〵うちへ帰りませう。オヽ帰りませう〳〵内へ帰つて山の神にお里女郎の話をして、男を大事にするやうに。オヽいふて聞かそ〳〵、とかく目明きの亭主さへ気儘気ずいの買ひぐらひ。小使銭の出入れも旨にしをる。と銘々が仇口々に右左。お里も会釈笑顔よく別れて在所道わが家をさして帰りゆく。

B② 沢市がお里を詰問	イヤコレお里、わしやそなたに尋たい事が有。マア〳〵下に居や。ハテサテ月日の立は早いもの。一所に成てからモウ三年。互ひに心を知て居る。隠さずにいふてくれ。と改つたる詞の端。お里は更らに晴やらずコレ沢市さんそりやお前何をいはしやんす嫁入してから三歳の間只の一度も隠し立したよふな事はない。夫れ共にお気に入ぬ事有ばいふて聞して下さんせ。それが夫婦じやないかいの。といへば沢市腹を立、ムウさふいへばこつちも云ふぞ。ヲヽ何成といはしやんせ。ヲヲいはいでか、コリヤお里よふ聞けよ私と夫婦になって丸三年そりや毎晩七つから先寝所へ手をやつてもついに一度も居た事が有か。そりやもふおれは此やうな盲目。殊にゑらい疱瘡で見るかげもない。どうでわれの気に入らぬは無理ならねど、外に思ふ男が有ばさつぱりと打明て云てくれたら此様に何の腹を立てうぞい。尤われとおれとは従弟どし。専ら人の口端にも、アノお里は美しい〳〵と聞く度々わしややう諦めてゐる故、悋気はせぬ。コレどうぞ明して云ふてたも。とさすが盲目の悲しさに何も知らぬ心根を、	イヤコレお里わしやそなたにちと尋たい事が有。マア〳〵下に居や。ハテサテ下にゐやいのう。外の事でもないがいつぞは聞ふ〳〵と思ふて居たが丁度幸い。光陰矢の如しとやら。月日の立は早いものなア。わがみとおれとがコウ一所に成てからモウ三年。稚い時より言なづけ。互ひに心を知て居るに、なぜそのやうに隠しやるぞ。隠さずにさつぱりと打明けていふてたも。とどこやら濁る詞の端。お里は更らにがてん行かず、不しんながらに、コレ沢市さんそりやお前何をいはしやんす。嫁入してから三歳の間、ほんに〳〵露程も隠し立したよふなことござんせぬが、夫れ共に何んぞ又、お気に入ぬ事有ば、いふて聞して下さんせ。それが夫婦じやないかいな。とムウさふいやればこつちも云ふぞ。ヲヽ何成といはしやんせ。ヲヲいはいでかコリヤお里、よふ聞けよ。私と夫婦になって丸三年。毎晩七つから先寝所へ手をやつてもついに一度も居た事が有か。そりやもふおれは此やうな盲目。殊にゑらい疱瘡で見るかげもないどうでわれの気に入らぬは無理ならねど外に思ふ男が有ばさつぱりと打明て云てくれ。尤われとおれとは従弟どし、専ら人の口端にもアノお里は美しい〳〵と聞く度毎におれはやう諦めてゐるほどに、悋気は決してせぬぞや。コレどうぞ明して云ふてたも。と立派に云へど目にもるゝ涙呑込む盲目の、心の内ぞせつなけれ。
B③ お里の真情吐露	聞いてお里は涙ぐみヱヽソリヤ胴欲な沢市さん。いかに賤しいわたしでも主有お前をふり捨て外に男を持よふなそんな女と思ふてか。お前と女夫にならぬ先、御家老筑後縫之助様より私をくれと仰言つたを断いふた私の心。お前と女夫に成たい斗。ヱヽほんに〳〵、とゝ様やかゝ様に別れてからはおぢさんの内へ引取られお世話になり、お前と一所に育てられ、三つ違いの兄さんと云ふて暮せし其内に、生れ	聞くにお里は身も世もあられずすがり付てヱヽソリヤ胴欲な沢市さん。いかに賤しいわたしでも主有お前をふり捨て外に男を持よふな、そんな女と思ふてか。ソリヤ聞えませぬ〳〵ヱヽ、聞えませぬわいなア。とゝ様やかゝ様に別れてからおぢさんのお世話になり、お前と一所に育てられ、三つ違いの兄さんと云ふて暮してゐる内に情なやこなさんは生れも付ぬ疱瘡で、目界の見へぬ其上に貧苦迫れど何のそ	イヤコレお里。わしやそなたに。チト尋ねたい事がある。マア〳〵下に居や〳〵。ハテさて下に居やいなう。外のことでもないが。いつぞは聞かう聞かうと思うて居たが。丁度幸ひ。光陰矢のごとしとやら。月日の経つはア、早いものなアソレわが身とおれが。カウ一緒になつてからモウ三年。稚い時より許嫁。互に心も知つて居るにマなぜ。其様に隠しやるぞさつぱりと打明けて。言うてたもとどこやら濁る詞のはし。お里は更に合点行かず不審ながらに。コレ沢市様。そりやお前何をいはしやんす。嫁入してから三歳の間。モほんに〳〵露程も。隠し立てした事はござんせぬが。それともに何ぞ又。お気に入らぬ事あれば。言うて聞かして下さんせ。サそれが夫婦ぢやないかいな。ム、さう言やればこつちも言はう。オ、何なりと言はしやんせ。オ、言はいでか。コリヤお里。マよう聞けよ。われと夫婦になって丸三年。毎晩七つから先。寝所へ手をやつても。つひに一度も居た事がない。ソリヤもうおれは此様な盲目。殊にえらい疱瘡で。モ見る影もない顔形。どうでわれの気に入らぬは無理ならねど。外に思ふ男があらば。さつぱりと打明けて。言うてくれたら此様に。何の腹を立てうぞい。尤もわれとおれとは従兄弟同士。専ら人の噂にも。アノお里は美しい〳〵と。モ聞く度毎におれはもう。よう諦めて居る程に。悋気は決してせぬぞや。コレどうぞ明かして言うてたもと。立派に言へど目にもるゝ。涙呑込む盲目の。心の内ぞせつなけれ。
		聞くにお里は身も世もあられず。縋り付いて。ヱヽソリヤ胴欲な沢市様。いかに賤しい私ぢやとて。現在お前をふり捨てゝ。外に男を持つ様な。そんな女子と思うてか。ソリヤ聞えませぬ〳〵。エヽ聞えませぬわいな。モ父様や。母様に別れてから。伯父様のお世になり。お前と一緒に育てられ。三つ違ひの兄さんと。いうて暮してゐる内に。情なやこなさんは。生れも付かぬ。疱瘡で。眼かいの見えぬ其上

も付ぬ疱瘡で目界の見へぬ其と成てわたしは顔に疱瘡の跡さへなくて仕もふた。そは義理を思ふておぢ様実のおまへを人に預け私を手づから御介抱其お情の有難さ子供心に成人して沢市さんと女夫に成、手引共成杖共成大恩受けたおぢさまの万分一の恩報じと思ふた念が届いたか。女夫に成た其日からお前の目をば治さんと、此壺坂の観世音。昔の帝のお眼病平癒なさしめ給ひしと伝へ聞いたる其為に明けの七つに鐘を聞き、そつと抜出で只一人山路いとはず三歳ごし願ふてゐても御利益のないとは何の報ひぞや。観音様も聞へぬと今も今迚恨んでゐた。私の心もしらずして外に男が有るやうに今のお前の一言が私は腹が立わいのと口説き立たる貞節の涙の色ぞ誠なり。

の、一たん殿御の沢市さん、たとへ火の中水の底、未来までも夫婦じやと思ふ斗コレ申。お前の目を治さんと此壺坂の観世音。明けの七つに鐘を聞き、そつと抜出で只一人、山路いとはず三歳ごし、せつなる願ひに御利益のないとはいか成報ひぞや。観音様も聞へぬと今も今迚恨んでゐた。私の心もしらずして外に男が有るやうに、今のお前の一言が私は腹が立わいのと口説き立たる貞節の、涙の色ぞ誠なり。

に。貧苦迫れど何のその。一旦殿御の沢市様。たとへ火の中水の底。未来までも夫婦ぢやと。思ふばかりかコレ申し。お前のお目を治さんと。此壺坂の観音様へ。明の七つに鐘を聞き。そつと抜出で只一人。山路いとはず三歳越。せつなる願ひに御利生のないとは如何なる報いぞや。観音様も聞えぬと。今も今とて恨んで居た。私の心も知らずして。外に男がある様に。今のお前の一言が。私は腹が立つわいのと。口説き立てたる貞節の涙の。色ぞ誠なり。

B④ 沢市の詫び言

聞て沢市手持なく何の答へももぢ〳〵と脊撫さすり手を合せ、アアコレ女房、何も云ぬ堪忍してくれい。そふとは知らず、かたわのくせに愚痴斗。コレこらへてくれ。と詫び涙。指で目ぶたを引ぱつてもくらきに迷ふ盲目の見る事ならぬ業病は何の因果と男泣。イヤこれ女房我身の志死んでも忘れぬ。

始て聞し妻の誠。今更何と沢市が詫の詞も涙声。アアコレ女房ども。何も云ぬ堪忍してたも。謝つた〳〵〳〵わいの。そふとは知らずかたわのくせに愚痴斗。コレこらへてたも。とばかりにて手を合したる詫び涙袖や袂を浸すらん。やう〳〵涙押拭ひ、あやまつた。女房のお里も涙にくれながら顔を上げ、のふお前の疑ひはれたのも偏に仏の御慈悲ぞと喜ぶも又道理也。

始めて聞きし妻の誠。今更なんと沢市が。詫びの詞も涙声。アヽコレ女房ども。何にも言はぬ堪忍してたも。誤つた。〳〵〳〵わいなう。モウそうとは知らず。不具の癖に愚痴ばかり。コレ堪へてたもれとばかりにて。手を合はしたる詫び涙。袖や袂を浸すらん。アヽコレ連添ふ女房に何の詫び。お前の疑ひ晴れたれば。私や死んでも本望ぢやわいな〳〵。イヤモウさう言うてたもる程。わが身の手前面目ないわいなう。

B⑤ 夫婦共に壺坂寺へ

忝いが夫程信心してくれてもおれが此目は治りはせぬ。エヽそりゃマア何を言はしやんすやら。三歳が間観音様へお願ひ申した一心で御利益有るはしれた事。サアわれは三年してくれても肝心のおれは夢にも知らず何ぼうわれが願ふてくれても御利益の有う筈がない。エヽ何のいなア。わしの体はコレイナアおまへの体も同じ事。心にかけて願ふて下さんせと、夫大事と女房の詞は実にもかくやらん。沢市も頭を上げ、そうじや。そんなら此上はわれと倶〳〵参て見ん。気の毒ながら連て往てたも。と云へばお里も悦んで、そんなら早うと身拵へ。痛はりながら

沢市涙押拭ひ、夫程に迄信心してたもつてもおれが此目はコレマア治りはせぬわいのふ。エヽそりゃマア何を言はしやんすぞいな。此年月の憂艱難。雨の夜雪の夜霜の夜もいたはぬ私しがはだしまゐりもみんなお前の為じやぞへ。サアそれ程に迄祈誓をかけ願ふてたもつた志。有難いとも嬉しいとも何んぼ知らぬ、と云ひながら其女房のそなたをば、此年月の廻り根性。観音様と云ふたとて罰こそあたれ何のマア此目に明いてたまる物かいのふ。エヽ何のいなア。わしの体はコレイナアおまへの体も同じ。愚痴を云はふよりちやつと心を取直し、観音様へ共々に

ガそれ程にまで信心してたもつても。おれが此目はコレ。マ治りはせぬわいの。エヽ。ソリヤマア何を言はしやんすぞいな。此年月の憂き艱難。雨の夜。雪の夜霜の夜も。厭はぬ私が跣参りも。みんなお前の為ぢやぞえ。サア。それ程に祈誓をかけ。願うてたもつた志。有難いとも。嬉しいとも。其貞節なそなたをば。此年月の廻り根性。観音様ぢやと言うたとて。罰こそあたれ何のマア。此目が明いてたまるものか。エヽ何のいな。私の体はコレイナアコレ。お前の体も同じ事。そんな愚痴を言はうより。ちやつと心を取直し。観音様へ共々に。お頼み申して下

壺坂寺の段

区分	原作	一次	現行
C① 壺坂寺への道中	伝へ聞く壺坂の観世音は人皇五十代桓武天皇奈良の都にまします時御眼病甚しく、よつて此壺坂の観世音へ、時の方丈動喜上人一百七日の御祈祷にて忽ち平癒有らせられ、今に至つて西国の六番の札所とは、皆人〳〵のしる所。折しも坂の下よりも沢市夫婦辿り来て漸う汗を押拭ひ、辺り見廻し女房がコレ沢市さん。信心は大事なれど、お前のやうに病気が猶重ふ成る。誰もゐぬのを幸ひに日比覚への歌成りと気晴しのため諷ふて見やしやんせぬか、と女房がすゝめに沢市打点頭き、ムゝホンニそふじやの。われが言通り、くよ〳〵思ふは目の毒じゃ。アゝさらへと思ふてやつてのけふ。しかし誰も居やせぬか。エゝ儘よ。人は居ても目にはわからぬ。こんな時は身の一徳。ハゝゝ。これなア仇口利ずと諷はしやんせ。ヲツト合点、と杖持つて片手に拍子取々の諷ふ唱歌も身の上の暇乞とは神ならず歌のふしさへ跡や先。心はくもる、しめり声。うきが情か情が憂か、露と消え行く我身の上は。ヲゝあぶないわいなあ。	伝へ聞く壺坂の観世音は人皇五十代桓武天皇奈良の都にまします時、御眼病甚しく此壺坂の観世音へ時の方丈動喜上人一百七日の御祈祷にて忽ち平癒有らせられ、今に至つて西国の六番の札所とは、皆人〳〵のしる所。げに有難き霊地なり。折しも坂の下よりも詠歌を道のしほりにて、沢市が御寺間近く詣て来て、コレ沢市さん。信心は大事なれど、病は気からといふからは、お前のやうにコレしほ〳〵していやしやんすと猶病ひは重らふこんな時にはわつさりと日比覚への歌成りと諷はんしたらどふじやいのふ。ムゝホンニそふじやの。我が身の言やる通り、くよ〳〵思ふは目の毒じやげな。そんなら、アゝさらへと思ふてやつてのけふ。しかし誰も居やせぬか。エゝ儘よ。うきが情か情が憂か、露と消え行く我身の上は。ヲゝあぶないわいなあ。コレハしたり。其様に引ぱりやんないのふ。引ぱつた斗りに恂りして肝が宿がへか。アゝしもふた。跡は皆忘れた。アハゝゝホゝゝと歌を暫しの道草に御本堂へ	伝へ聞く壺坂の観世音は人皇五十代。桓武天皇奈良の都にまします時。御眼病甚しくこの壺坂の尊像へ。時の方丈動喜上人一百七日の御祈祷にて。忽ち平癒あらせられ今に至つて西国の。六番の札所とは皆人々の知る所。げに有難き霊地なり。折しも坂の下よりも。詠歌を道の栞にて。沢市夫婦漸うと御寺間近く詣で来て。コレ沢市様。信心は大事なれど。病ひは気からといふからは。お前の様にしを〳〵と。鬱いでばかり居やしやんすと。猶病ひは重ならう。コレこんな時にはわつさりと。日頃覚えの唄なりと。気晴らしに歌はんしたらどうぢやの。ムゝほんにさうぢやの。わが身の言やる通り。くよ〳〵思ふは目の毒ぢや。そんならアノ浚へと思うてやつて退けう。しかし。誰も見て居やせぬかや。エゝ儘よ。憂きが情か情が憂きか。チンツチ、ンツチツンツ露と消行く。チチン我が身の上は。チンチチチリンツテチリツテントンシヤンアイタ、、、、。アしもた。今躓づいて。跡の合ひの手皆忘れた。ア
	手を引て壺坂さして出て行。	お願ひ申して下さんせ〳〵。と夫を思ふ貞心の心遣ひぞ哀れなり。涙にくれながら、ヲゝ過分なぞや女房。そなたが一心のすはつた上は、御仏の枯れたる木にも花咲くとやら。見へぬ此目は枯れたる木。アゝどふぞ花が咲したいなと云ふた処が罪の深い此身の上。せめて未来をイヤサアノ女房共、手を引いてたも。いざ〳〵といふに嬉しく女房が、身拵へさへそこ〳〵にいたわり渡す細杖の、細き心も細からぬ。誓ひはふかき壺坂の、お寺をさしてたどり行	さんせ。〳〵。と夫を思ふ貞心の。心遣ひぞ哀れなり。沢市涙にくれながら。オ、過分なぞや女房ども。さうそなたが一心の。据つた上は御仏の。枯れたる木にも花が咲くとやら。見へぬ此目は枯れたる木。アゝどうぞ花が咲したいな。と言うた所が。罪の深いこの身の上。せめて未来を。イヤサアノ女房ども。手を引いてたもいざ〳〵。といふに嬉しく女房が。身拵さへそこ〳〵に。いたわり渡す細杖の。細き心も細からぬ。誓ひは深き壺坂の御寺を。さして。辿り行く。

もそつとこちへ。ヱヽ我が身が引はつた斗りに恂りして肝が宿がへ。跡は皆忘れて仕舞ふた。アヽヽヽホヽヽと歌を暫しの道草に御本堂へと登り来て、

C②
沢市を残しお里が帰る

サア〳〵沢市さん、もう来た程に御詠歌を上ませふ。女夫が咄しの其処へ、名うての悪者うはばみの三、一人の男に囁き会ひ、お里の顔を打詠め小陰へこそは忍び行く。斯とは知らず夫婦づれ、唱ふる詠歌の音も澄みていとしん〳〵と見へにける。岩を建て水を湛へて壺坂の庭のいさこも浄土成らん。詠歌をあげて沢市が、コリヤお里、そちの詞に随ふて、叶はぬ事とは知りながら来る事は来ても中々に、此目が治る事はない。ヱヽ此人はいのふ。又しても〳〵そんな事。永々の眼病故急な事には行ぬ共兎角に気を静にもち信心さへすれば治る事は疑ひないと力を付れば沢市もほんに云ばその通り。わしはけふから只一人、三日が間爰に断食。治るとも治らぬとも此三日が運の定め。気良ふ云ふて下さんした。そんならわしも是より内へ帰り、倶に三日の断食しませう。日数が済めば迎ひに来るぞへ。そんなら日の暮れぬ内。ちつ共早ふ。アイ。あいとはいへど女房は夫の心いかゞぞと、心残して立帰る。

と登り来て、

サア〳〵沢市さん来たはいな。ハアもふ茲が観音様かや。ヤレ〳〵有難や〳〵。ハアアはなむあみ陀仏〳〵。コレ〳〵こちの人、今宵こそゆつくりと御詠歌を夜もすがら、上ませふでは有るまいかと夫婦共、唱ふる詠歌の声も澄みていとしん〳〵と殊勝なる。岩を建て水を湛へて壺坂の庭のいさこも浄土成らん。コレお里、そなたの詞に従うて叶はぬ事と思え共来る事は来ても中々に、此目が治りそふな事はないわいのふ。ヱヽ此人はいのふ。又しても〳〵そんな事。コレ此壺坂の観音様、桓武天皇奈良の都にまします時、眼病にて御悩。それ故に此観音様へ御立願なされた時、早速にお目が明いたげな。それ故お前に勧むるも、天子様じやといふたとて、たとへ虫けらのやふな我々でもあなたに隔てはないわいなあ。兎角に信心といふものは気を長ふ歩みを運んで心を鎮めて一心に、おすがり申せば何事も叶へてやろとのお慈悲じやわいのふ。そんな事いふ手間で、サア〳〵早ふお唱へ申しましよと力を付れば、いかさまのふほんにいやればその通りそんならコレわしは今宵から三日が間爰に断食する程にそなたは早ふ内へ往んで何かの用事しまふておじや。治るとも治らぬとも此三日が間運定め、気良ふ云ふて下さんした。そんならわたしも内へ帰り何かの用を片付て、すぐに来ませふ程に、コレかならず何処へも行かしやんすな。ヲヽどこへ行かふぞ。これからこんやはアノ観音様と首引きじや。アハヽヽ、ホヽヽと笑ひながらに女房が跡に心は置露の散りて果敢なく別れ共知らでとつかは急ぎ行。

ハ、、、、。ホ、、、、と。唄を暫しの道草に。御本堂へと登り来て。

サア〳〵沢市様。ソレ観音様へ来たわいな。ハアモウ爰が観音様か。ヤレ〳〵有難や有難や。ハア、南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏〳〵。コレ〳〵こちの人。今宵こそゆつくりと。御詠歌を夜もすがら。上げませうではあるまいかと夫婦して。唱ふる詠歌の声澄みて。いと森々と殊勝なる。岩を建て。水をたゝへて壺坂の。庭の砂も浄土なるらん。コレお里。叶はぬ事とは思へども。そなたの詞に従うて。来ごとは来ても中々に。此目は治りそうな事はないわいなう。エ、此人わいなう。又しても〳〵そんな事。コレこの壺坂の観音様。昔桓武天皇様。奈良の都にまします時。眼病にて御悩み。それ故にこの観音様へ。御立願なされた時。早速御目があいたげな。それ故お前に勧めるも。ハテモウ天子様ぢやと言うたとて。たとへ虫螻のやうな我々でも。あなたに隔てはないわいな。モ兎角信心といふものは。気を長う歩みを運んで。心を鎮め一心に。お縋り申せば何事も。叶へてやろとのお慈悲ぢやわいなう。そんな事いふ手間で。早うお唱へ申しませうと。力を付くればいかさまなう。ほんに言やれば其通り。そんならわしは今宵から。三日の間。爰に断食する程に。そなたは早う内へ去んで。何かの用事仕舞うておぢや。治るとも。治らぬとも。この三日の間が運定め。オ、よう言うて下さんした。そんなら私も内へ帰り。何かの用事片付けて来ませう。ガコレ沢市様。このお山は険しい山道。殊に坂を登りて右へ行けば。幾何丈とも知れぬ谷間ぢや程に。コレ構へてどつこへも。オ、どこへ行かうぞ。今夜から観音様と首引きぢや。アハ、、、、。ホ、、、、と笑ひながらに女房が跡に心は置露の。散りてはかなき別れとも知らでとつかは急ぎ行く。

C③ 沢市の嘆きと投身	跡見送りて沢市はこらへ〳〵し胸の内、一度にわつと泣き出だし、此年月の辛抱を若い心で苦にもせず、大事に懸る志。嬉しいぞよ。今別れるが一生の別れ。嘸やとつかは迎ひに来て、死んだと聞は嘆くで有ろ。夫斗りが気にかゝり迷ひはせんかとくり返へし、唯の一度もあいそ尽さずあまつさへ目界の見へぬこの俺を大事に掛てたもる志。それ共知らず色々の疑い立。コレ堪忍してたも。今別れてはいつの世に、又合ふ事の有べきか。不便の者やいじらしやと大地にどふと身を打ふし、前後不覚に歎きしが、漸々顔を上、アアもふ〳〵なげくまい〳〵。三歳の間願ふても、何の利益もないものにいつ迄生ても詮ない命。世の諺にも言通り、退けば長者が二人のたとへ。わしが死ぬのがそなたの為。生ながらへて何れへ成と縁付しや。人なき中に、そふじや〳〵と立上り、乱るゝ心取直し下る段さへ四つ五つ。六つを告来る暮の鐘。杖一本が力草。足元さへも定らず、不動の水や六本杉。岩に刻みし五百の羅漢。弘法大師の御作と聞くも尊き此霊場。せめてお寺の土となり、未来は必定、仏の導き給へと手を合せ、いと物凄き谷水の流れの音もとふとふと響き渡りし瀧川瀬紛ふ斗の深谷ゑい渓探り〳〵て沢市が杖と笠とを傍らに置き、南無阿弥陀仏と斗りにて、いふ声倶に飛込だり。	コレ過分なぞや女房共。此年月の介抱其上貧苦に迫る此をれを唯の一度もあいそ尽さずあまつさへ目界の見へぬこの俺を大事に掛てたもる志。それ共知らず色々の疑い立。コレ堪忍してたも。今別れてはいつの世に、又合ふ事の有べきか。不便の者やいじらしやと大地にどふと身を打ふし、前後不覚に歎きしが、漸々顔を上、アゝもふ〳〵なげくまい〳〵。三歳の間女房が、信心凝らして願ふても、何の利益もないものにいつ迄生ても詮ない此身。世の諺にも言通り、退けば長者が二人のたとへ。わしが死ぬのがそなたの為。生ながらへて何れへ成とよき縁付をしてたも。ヤレ人なき中に、そふじや〳〵と立上り、乱るる心取直し下る段さへ四つ五つ。早明け六の鐘の音。いざ最後時急がんと、杖を力に盲目のさぐり〳〵てよふくと、こなたの岸に下り立てはいと物凄き谷水の流れの音もとふ〳〵と響きを心のあて。瀧のそば杖をかたへにつき立て南無阿弥陀仏と諸ともに、がばと飛込む身の果の、哀れなりける次第也。
C④ お里の嘆きと投身 （転落）	跡へいきせき女房が、アノ気にかかる胸騒ぎ。最前の歌と云ひ沢市さんの身の上が案じられ、道から直に取て返し、本堂をさがしても姿も見へず、どふした事と気は狂乱。尋探せど真くらがり。沢市様いのふ〳〵と、あちらへうろ〳〵こなたへ走り、足にさはりし杖と笠。見るより女房はつと斗。合点行ずと思ひしに目の明かぬを悲しみて、さては此谷間へ身を投げさしやんしたかいなア。エゝそりや余り胴欲じやわいのふ。お前の病気を治さふと朝夕祈りし甲斐ものふ、死ると云ふは何事ぞ。跡に残ったわしが身は、誰を便りにしませふと返らぬ事をくり返へ	（不明）
	跡に沢市只一人。こらへし胸の遣瀬なくかつぱと伏して。泣きゐたる。コレ嬉しいぞや女房ども。此年月の介抱其上に。貧苦にせまる厭ひなく。只の一度も愛想つかさず剩へ。眼かいの見えぬこの身をば。大事にかけてたもる志。それとも知らず色々の疑ひだて。コレ堪忍してたも〳〵。今別れてはいつの世に。又逢ふ事のあるべきか。不便の者やいぢらしやと大地にどうと身を打伏し前後。不覚に歎きしが。漸うに顔を上げ。アゝ歎くまい〳〵。三年の間女房が。信心凝らして願うても。何の利益もないものを。いつ迄生きても詮ない此身。世の諺にもいふ通り。退けば長者が二人のたとへ。わしが死ぬのがそなたへ返礼。生き永らへていづれへなりと。よき縁付きをしてたもや。ヤ。ヤ。ム、。最前聞けば。アノ坂を登りて右へ行けば。幾何丈とも知れぬ谷間との事。これ究境の最期所。かゝる霊地の土となれば。未来は助かる事もあらん。ム、幸ひに夜は更けたり。人なき中に。オ、さうぢや。さうぢやと立上り。乱るゝ心取直し。上る段さへ四つ五つは暁の鐘の音。イザ最期時急がんと。杖を力に盲目の探り。探りて漸うとこなたの。岩にかき上れば。いと物凄き谷水の。流れの音もどう〳〵と。響くは弥陀の迎ひぞと。杖を傍につき立て、。南無阿弥陀仏と諸共に。がはと飛込む身の果ては哀れなりける次第なり。
	かゝる事とも露知らず。息せき道より女房が取つて返すも気はそぞろ。常に馴れにし山道も辷り落つやら転ぶやら。漸う登る坂の上。ヤア。コリヤコレこちの人が見えぬわいな。沢市様。沢市様いなう。沢市様いなう。と尋ね廻れど声だにも。人影さへも見えざれば。あなたへうろ〳〵こなたへ走り。沢市様いなう。沢市様いなうと爰かしこ木の間をもるゝ月影に透せば何か物ありと。立寄り見れば覚えの杖。ハツト驚き遙かなる。谷を見やれば照る月の。光に分つ夫の死骸。ハアこりやマアどうせう悲しやと。狂気の如く身を悶え。飛び降りんにも翅なく呼べど	

谷底の段

区分	原作	一次	現行
D① 観音の登場	山また山の谷底に沢市夫婦は気絶して、息も通はぬ其有様。爰に不しぎやこくふに声有り。沢市々々と声かけられて息吹返し、何心なくふり返り見れば尊やコハいかに、十二一ト重に緋の袴、いとも気高き女郎（上臈）の御姿にてあらはれ出観音、妙音の御	（不明）	頃は二月。中空や。早や明け近き雲間よりさつと輝く光明につれて。聞ゆる音楽の音も妙なる其中に。いとも気高き上臈の姿を仮に観世音。微妙の御声うるはしく。いかに沢市承はれ。汝前生の業により盲目となつたり。しかも両人ながら。今日に迫る命な

し、筐にありし杖と笠抱きしめ〳〵声上げて、歎く涙は谷川に水の逆立ごとくなり。折からうそ〳〵小陰より以前の悪者二人連れ、イヤコレ姉様、最前からのよまい事。何にも案じる事はない。便りにする者たんと有。アノやうなどふめくらを大事にしてもふ明かぬ。死だものをいつ迄いふても役に立たぬわ。男に持て何不足のないうわばみの三さんじゃ。サア連れて居て女房にすると手を取ればふり放し。エ、そこどこではないわいのふ。こいつはしぶといどめらふじゃなア。わりやだふ有てもいやじやといふのか。エ、そんな事は聞きともないと、すきを見て逃出せば、どつこいそふわと抱留れば、一生懸命むしやぶり付首筋ねぢ付ケ踏倒し、是程いふても耳にも入れぬ此女。うぬも一所にどめくらと地獄の道を行きさらせと、情を知らぬ悪者共、お里の両足引掴み谷間へどふと突放し、跡を見ずして帰りける	叫べど其甲斐も答ふる物は山彦の谺。より外なかりける。エ、こちの人聞こえませぬ。聞こえませぬ〳〵わいな。この年月の艱難も。厭はぬ私が辛抱はな。どうぞ早う眼の明きます様。お助けなされて下されと。祈らぬ間とてもないものを。今日に限って此しだら。跡に残つて私やまあ。どうなるぞいなア。どうせうぞいな。どうせうぞいな〳〵〳〵。ア、是を思へば最前に。歌はしやんしたアノ唄は。どうやら心にか、つたが。今で思へば其時に。死ぬる覚悟であつたのか。エ、知らなんだ。知らなんだ〳〵わいな。斯ういふ事なら何のマア。お前を無理に連れて来ませう。堪忍して下さんせ。堪忍して下さんせ〳〵。ほんに思へば此身程はかない者があろかいな。二世と契りし我が夫に永い別れとなる事は。神ならぬ身の浅ましやか、る憂目は前の世の。報いか罪かエ、情なや。此世も見えぬ盲目の闇より。闇の死出の旅。誰が手引をしてくれう迷はしやるのを見るやうで。いとしいわいのと掻口説き。口説き立て〳〵歎く涙は。壺坂の谷間の。水や増さるらん。漸う涙の顔を上げ。ア、悔やむまい歎くまい。皆何事も前の世の。定り事と諦めて。夫と共に死出の旅。急ぐは形見の此杖を。渡すは此世を去つて行く。行先導き給へや南無阿弥陀仏弥陀仏の。声諸共に谷間へ。落ちてはかなき身の最期貞女の程こそ哀れなり。

	声にて、いかに沢市我は壺坂観音なり。汝の眼病平癒させ一命助け遣はすと宣ふ声に打驚き、コハ有難きと見返れば御姿消てなかりけり。		れども。妻の貞心又は。日頃念ずる功徳にて。寿命を延ばし与ふべし。此上はいよ〳〵信心渇仰して。三十三所を順礼なし。仏恩報謝なし奉れ。コリヤお里。〳〵。沢市〳〵。と宣ふ御声諸共に。かき消す如く失せ給へば。
D② 夫婦が息を吹き返す	女房お里も息吹返へし、見れば夫の此有様。ヤアおまへは、わりや女房どふして爰へ。サイナア最前お前に別れ帰りしも虫が知すか何とやら、心にかゝりしそれ故に、取て返へしてさがす中、足にさわりし杖と笠残つて有れば死なしやんしたに違ひはないと、涙にくれて居る所へ悪者共に取まかれ、この谷へ落されしも是もつきせぬ夫婦の縁と聞て恂り。	（不明）	早や。晨朝の鐘の声四方に。響きて明け行く空。ほの〴〵暗き谷間には。夢とも分かぬ二人とも。むつくと起きて。ヤアこなたは沢市殿。ア、コレこちの人。お前の眼が明いてあるがな。エ、。アノ。ほんにコリヤ眼が明いてある。オ、。眼が明いた。眼が明いた〳〵〳〵〳〵。眼が明いた。眼が明いた。チエ、観音様のお蔭。有難うござります。有難うござります〳〵〳〵〳〵。わいなう。ム、。そしてアノ。お前はマアどなたぢやえ。どなたとは何ぞいの。コレ私はお前の女房ぢやわいな。エ、。アノお前がわしの女房かえ。コレハ。シタリ始めてお目にかゝります。ア、嬉しや〳〵。それにつけても不思議な事。正しくわしは谷へ落ち。死んだと思うて何にも知らぬ其中に。観音様がお出でなされ。前生の事。こま〴〵と御知らせ。サイナア。私もお前の跡を追ひ。谷へ落ちたに違ひはない。が身内に一つも疵つかず。其上お前のお目は明く。ホ。コリヤマア夢ではないかいな。ム、そんなら今。沢市〳〵とおつしやつたが。コリヤ観音様が直々に。お呼生け下されましたに違ひはない。
D③ 夫婦の喜び	ハア有がたや忝や、一人ならず二人助けて下さる御情と、悦び勇んで辺りを見れば霞色どる山々の木々の梢も花盛り。くまなく見ゆる其思ひ。譬へがたなき風情なり。是よりすぐにお礼の詠歌、お里諸共打連れて御本堂へと参詣し納る杖は今の世の宝物とこそしられけり。これも遍に壺坂の観世音の御利益と、かゝる例しも有難き、いはれを爰に残しける。	（不明）	ハ。ハ。ハハア有難や忝けなや。是より直ぐにお礼参りは浮木の亀。始めて拝む日の光は。年立返る。心地ぞや。是ぞ誠に観音の。御利生ありけるや。見えぬ眼も見え明らかに。有難かりける新玉の。年立返る如くにて。水も漏らさぬ夫婦の命も助かりけるは。誠に目出度う候ひける。今日は嬉しや杖を納めて折しも朝の。日の目を拝んで。お礼申すや神や仏。万見せ給ふはこれ偏に観世音。これ。偏に観音の。誓ひの重きは岩を建て水を。たゝへて壺坂の庭の。砂も浄土なるらん御示し有難。かりける御法なり